

「注好選」研究一試論：東寺本中・下巻重出説話七話を手がかりにして

高橋，敬一
福岡女子短期大学講師

<https://doi.org/10.15017/10471>

出版情報：文献探究. 15, pp.27-31, 1985-02-25. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

「注好選」研究一試論

——東寺本中・下巻重出説話七話を手がかりにして——

高橋敬一

東寺本「注好選」の出現によって、従来おぼろげでしかなかった「注好選」の全貌がほぼ明らかになった。つまり、宮内庁書陵部本が、上巻と中巻の前半だけからなる零本であったのに対して、この古写本は、完本ではないが一応、上・中・下の三巻を備えているからである。しかしながら、まだ説明されなければならぬ問題も残されている。たとえは、東寺本中巻にみられる他巻との異質性の問題である。この中巻は、上・下巻と較べてみると、次のような点で異なっている。(注二)

- ① 東寺本中巻の題は、「注好選抄中」となっているが、上・下巻はともに「注好選上・下」とあり、「抄」の字はない。
- ② 東寺本中巻に存する下巻との重出説話七話は、その編集意図からして本来は下巻にあるべきはずのものであると考えられる。
- ③ 東寺本中巻には、本来の中巻にあつたはずの説話(二ないし三話)が欠けているように思われるが、上・下巻にはそのようなことはない。

これら一つ一つの解明は、東寺本中巻の性格は勿論、「注好選」成立の事情にもかかわる今後の残された重要な課題である。

ところで、この東寺本中巻の性格については、今野達氏と馬淵和夫氏が、それぞれ異なる見解を示しておられるので、まずそれを紹介しておく。少し長くなるが、主な部分をそれぞれ論文および解説から引用させていた。

今野説||混成抄本説

東寺本中巻は、本来の中巻よりの抄出を主体に一部下巻よりの抄出を付録した混成抄本と見られるもので、内容的には第一から第四十までが中巻、第四十一以降が下巻よりの抄録である。(略) 東寺本注好選は一種の寄せ本で、本来の上・下巻に、一部下巻収載話をも付録した中巻抄本を取り合わせたものと推断される。

(東寺観智院本「注好選」管見—今昔研究の視角から—「国語国文」52巻2号 昭58・2)

馬淵説||草稿本説

中巻もまた草稿本であり、第四十一話より第四十七話までは別に別の資料があり、それを中巻のその位置におさめたものの、内容的にこれは、ここではどうもゆわいと感じ、途中で筆をやめてそれは下巻に移したのであろう。そして下巻の編集を終えてから再び中巻の補欠をはかつて別に上中下を完成させた。東寺観智院本はその前段階の未成稿の姿を残したものでないだろうか。

(東寺観智院蔵「注好選」解題 ヨ中巻の問題 東京美術)

つまり、両氏の東寺本中巻に対する見解の相違は、一つには、下巻にあるべきはずの七話(下巻第二十六話から第三十二話まで)が、中巻に収載されている理由やそれに採り込まれるまでの経路に対する解釈の違いであるということができる。すなわち、今野氏は、中巻七話(第四十一話から第四十七話まで)は下巻からの抄出である

と考へ、馬淵氏は、中巻七話は別資料からの採集であり、しかも未成稿のままの姿をとどめてゐると考へておられるのである。

ところがここで、中・下巻重出説話七話を一話ごと丁字に比較してみると、どの説話にもほゞまりとした異同(文・用字等)が見られる。これは何故であらうか。先に見た西氏の解釈からすると、中・下巻七話を比較した場合、当然小異はあるであらうが、後に示す如くの大なる異同は生じないと考へられるからである。

以上のように、東寺本中巻の性格や成立事情にはまだ未解決の部分が多し、そこで本稿は、その解明の全く基礎的作業として、まず問題の中・下巻重出説話七話の本文を詳細に検討し、考察を加へようとするものである。

(注一)以下の三点については、今野氏論文(東寺観智院本「注好蓮」管見)を参考にさせて頂いた。

(二)

『東寺観智院藏「注好蓮」釈文』(東京美術 昭58)において、中巻第四十一話から第四十七話までの七話は、各話の表題だけが翻字され、本文は「下巻の釈文を見よ」ということで省略されている。そこで次に、中巻七話を翻字し、下巻との異同を合せて示すことにする。ただし、中・下巻では一行分の字数に違いがある(大体下巻に対して中巻の方が二ないし三字程多い)が異同として示さない。また、下巻の各話の番号も異同として示さないことにする。(異同表示記号)

▲……中巻における脱文・脱字 ||……下巻において脱文・脱字
|……用字法の違い(誤字も含みうる)・表題の異同・中巻欠脱
……文・文字の順序が上下入れかかっているもの

飛鳥絲一目第四十一

(異同)飛鳥係網一目

有人張鳥網待鳥即鳥來而只繫一目即網目非一目

是在多目鳥所得也行人勤修佛法如網目達一葉不可

期仏道必々有備習之過彼網但以一目如不得鳥又諸行

之中心停一行為正道以諸行為助道譬如網在多目得

鳥雖行多從一道究竟并諸行力也

(異同)①懸 ②ナシ ③芥(こららば正し) ④必 ⑤如不可

得鳥 ⑥從一道成佛(五字欠脱あり)

五通比丘聞禽獸辛苦第四十二

往昔久遠無世時有五通比丘五通者一神境通二天

眼通三天耳、四他心、五宿命、此比丘名曰精進力在山

中樹下寂求仏道時有四禽獸各相語云世間之苦何者

為重各答云鳥云吾飢渴苦第一 鶴云吾慙欲苦為第一

鹿云吾驚怖苦為第一 毒蛇吾嗔恚苦為第一是以知一切生

類言語音聲皆无不苦也得道之日皆開悟之凡夫之時等

迷无開悟云々

(異同)①道 ②依附左右常得安穩一者鶴二者鳥三毒蛇四鹿也此四

獸(二十三字欠脱) ③飢渴苦為第一 ④毒蛇云 ⑤毒蛇云吾嗔

恚苦為第一鹿云吾驚怖苦為第一 ⑥ナシ

古塚狐迷人心第四十三

外典云古塚有狐妖且老化為婦人顔色好頭變雲髮面

變粗大尾曳作長紅裳徐行傍荒林路日欲没時靜處

或歌或悲數啼翠眉不舉花顔低忽然一笑万態見者

十人八九迷假色定色迷人應過此文何就色者假実二色生々

世々无登處穴賢狂不可極也

(異同) ①夫 ②ナシ ③歡悲啼 (中卷本文が正し) ④仍 (ニ) ⑤依假実二色 ⑥謹入葺イ ⑦酒 ⑧者也

巨龍負蓬萊第四十四

(異同) 巨龍負蓬萊

外史云東南海中有大龍名如上其背常波洗何塵穢哉而現背上負蓬萊山高八万里其山上多生不死藥若人採之服羽化成仙々壽長樂厚文是此山論有无実有者童男臥女遂不見若実无者蒲鳩子到蓬萊仙宮擊蘭闥皇方士見黃妃素貞是知仙乎不仙之間有山有无也二疑不可執

(異同) ①其山上多不死藥 (中卷本文が正し) ②於此 ③有山 有无 (中卷本文が正し)

古馬嘶北風第四十五

(異同) 胡馬嘶北風

外史云漢海人通胡國貨易即彼朝馬四字分々 籊漢朝 將來依有恐敵 皇時御高預臣 王字分々 才未鳴王壽 即時出厩令食庭子盤迴向北風而嘶跳王臣共悅而云此馬何故常向北風嘶耶臣奏云忠已生土必有心得生國方吹始嘶也是云吾方風芳也况人倫尤可有懷土之心謹鳩子燕丹可說哉又畜生尚有此心為人尤不可忘生土者也故書云者 錦袴可返故鄉雖着錦衾不留故鄉

(異同) ①胡 (ニ) ②依有後恐 ③奇 (ニ) ④仍 (ニ) ⑤懷土之心 (中卷本文が正し) ⑥為人不可忘生土者也 ⑦云々ハ小字で右側

五菴蒔穀第四十六

昔天下成炎帝時政質人厚但仁而无偏頗其時三春之終五羽紫葦帝庭來一口咋粉一咋泥一鳴云遲々蒔殖一入水滋羽哈泥踏混其泥此五羽泥鳥常守此處至秋時即伴粉長生茎一本枝千也米一粒長四寸八寸分輪三寸也皮長五寸四分輪三寸二分以其稻皮為佛之葩一穗在三三百余粒或不足指之以一莖穗積車一兩而太重矣

(異同) ①葦紫 (中卷本文が正し) ②洽 ③一 ④鳥 ⑤小佛 ⑥結 (ニ) ⑦ナシ

口蝗虫遼海第四十七

(異同) 蝗虫遼海

大宋貞觀錄云此虫似螿其首赤政不直下乳故此虫兩千里之間食其苗空赤土始自多兩河及三輔終不見有苗即河南長史言以万民捕此虫償之給粟一斗錢三百爰一虫雖死百

(異同) ①自兩河 (ニ) ②其山上ニ不死ノ葉多シ

※注好還 秋史 (前掲書) において訂正すべきと認めらるる箇所 (主なもの)

- ・一七四ハニ行目 「其の山ノ上ニ不死ノ葉多シ」 ↓ 「其の山ノ上ニ不死ノ葉多く生ず」
- ・一七四ハ八十二行目 「況むや人倫尤も土之心を懐しむ可し」 ↓ 「況むや人倫尤も懷土之心有る可し」
- ・一七四ハ八十八行目 「其の時三春之終ニ五羽の葦紫帝ノ庭ニ來たり」 ↓ 「其の時三春之終ニ五羽の紫葦帝ノ庭ニ來たり」

右の異同をまとめると次のようになる。
 (一) 表題の異同 → 四ノ中巻41話・44話・45話・47話
 (二) 本文の異同 → 四十一(四十一)

文・文字の順序が上下いれかわったもの	誤字	用字法	脱字	脱文	
42⑤・43③・45④・46①	41③・43④・45①③⑩・46⑥	41①・43①⑥⑦・44②・46②	41⑤・42③④・43⑤⑧ 45②・46③⑤	41⑥・42② *空白箇所……45①箇所 47	中巻
上記と同じ	ナシ	上記と同じ	41②④・42①⑥・43②・44①③・45⑤⑥⑦⑧⑨・46④⑦	ナシ	下巻 *41⑥ → 中巻第41話(異同)⑥

(三) 以上のような結果から、東寺本中巻について、どのような位置づけが可能であろうか。私なりにまとめると、大体次の三点に行

① 東寺本中巻七話の本文は、転写されたものであり、しかもその書写態度はかなり杜撰であるように思われる。と言うのは、中巻第45話や第47話にみられる空白部分の存在が一つそれを証明しているように思われるし、あるいは下巻と比較してみても、中巻だけにみられる書写者の不注意によるし、かと思えば、脱文(ニヶ所)や誤字・脱字が多く存するところからも、転写過程を経ていることがうかがわれるのである。ただし、その依拠本が、かなり判読しにくいものであった可能性もある。それでは、中巻における明らか

な誤字が、ほぼ正字と字形が似た漢字に誤っている事実や前述のよう空白部分が存するからである。

② 東寺本中巻七話の依拠本は、東寺本下巻の該当部分よりは、すぐれた本文を有していたと思われる。と言うのは、中巻の杜撰な書写にもかかわらず、下巻と比較してみても本文としては、かなりすぐれた面をもっているのである。たとえば、下巻にみられる脱字(十四ヶ所)や文・文字の順序が上下いれかわっている部分(四ヶ所)などは、すべて中巻本文の方が正しいと判断されるのである。それにしては、下巻における文・文字の上下いれかわりはいのような事情によって生じたのであろうか、疑いがかかるところである。

③ 東寺本中巻七話の依拠本は、東寺本下巻そのものではなく、東寺本と異本関係にある本である可能性が高い。と言うのは、中・下

巻で漢字の用字法が違っていたり（六ヶ所）、各話の表題に異同が見られたりするのである。あるいは、一行分の漢字数の違いなどもその現われであるかもしれない。ところで、「注好選」に異本が生じていたことは、東寺本上巻において異本との校合をした書入れがあることや下巻の該当部分に一ヶ所だけであるがやはり存する（第28話、尚中巻第43話異同⑥）でわかるように、中巻の漢字とイ本注記の用字が一致することなどから十分考えられるのである。

すなわち、結論としては、東寺本中巻の最終部分に付加されている七話は、「注好選」下巻からの抄出ではあるが、直接東寺本下巻からの抄出というのではなく、東寺本とは異本関係にある本からの抄出であろうと考えられるということである。しかもその異本（依拠本）は、成稿本系のすぐれたものであつたのではないかとこのことである。

それでは、このように見ると、先に見た今野氏と馬淵氏の見解とどこが相違するのかわかると、まずその一は、両氏とも東寺本中下巻重出説話七話は少異はあつても全く同じ本文を有すると考えておられるように思うが、それはいづこが違うということである。その原因は、それぞれが依拠した本が別々であつたからであると考えられる。その二は、東寺本中巻の依拠本（中巻第40話までと第41話以降は同一本と考える）は、成稿本の可能性が高いということである。馬淵氏は、中巻は上巻とともに「やはり草稿本（草稿そのものか、その写本かは不明）の写し」ということにならう（前掲書・解題）という見方をされておられるのであるが、そのようには考えないであくことにする。その三は、いわゆる「東寺本中巻」の編纂目的は、あくまで「注好選」中下巻からの抄出成本の作成であり、その後何らかの理由によつて、東寺本中巻として収められたと見たこと

うことである。東寺本中巻としての位置は、本来の姿ではないということである。

以上、東寺本中巻の異質性について考察をしてきたのであるが、その結果、いわゆる「東寺本中巻」は、本来の東寺本中巻とは全く別のものであるという結論が導き出されることになつた。つまり、「東寺本中巻」の本来の性格は、「抄出成本」であるということである。その意味で東寺本「注好選」は寄せ本であるということがでまる。ご批判を乞う。

（追）本稿は第32回筑紫国語学談話会で口頭発表したものに加筆してなつたものである。席上貴重なご意見を下さつた方々に感謝申し上げます。）

——福岡女子短期大学講師——